

東院庭園 庭の宴

2013年から継続し今年で6回目となる、奈良文化財研究所主催の東院庭園庭の宴を2018年9月22日に開催しました。今年度から平城宮跡の活用に関する実践的な研究と位置づけて、文化遺産部遺跡整備研究室を中心に準備をしました。観覧者約200人がきれいな月を観ながら古代食と白酒(奈良パークホテル提供)を味わいました。

今年のテーマは称徳天皇の時代の「東院玉殿の完成」です。『続日本紀』神護景雲元年(767)4月14日条には東院の玉殿が新たに完成し、群臣が集まって祝ったこと、その建物には瑠璃色の瓦を葺き、水草の文様を描いたことが記されています。これに関連し、福嶋啓人研究員が「東院庭園の復元建物について」、岩戸晶子主任研究員が「東院玉殿に葺かれた緑釉瓦について」と題したミニ講演をおこないました。また、雅楽演奏家の太田豊氏らによる、雅楽歌謡である催馬楽「更衣」、東大寺大仏開眼法要に際して渡来した僧仏哲が伝えたと言われる舞楽「陵王」等が演奏されました。

古代衣装のファッションショーは、玉殿完成の祝いの後に、天皇と限られた側近の者が内輪の宴を東院庭園でおこなったという場面設定です。同年2月14日、天皇が東院に出御し、出雲国造出雲臣益方いづものくにのみやつこいずものおみが神事を奏して外従五位下を授けられ、同行した祝部はふり(地方の社の下級神職)らも位等を与えられたことに因み、宴に先立ち、称徳天皇から出雲臣益方が位記を授与され、祝部が舞を奉納する演出とし、巫女の経験のある研究員が舞を披露しました。

平城宮跡の活用方法については夜間の東院庭園に限定せず、新たな展開を考えたいと思っています。

(文化遺産部 内田 和伸)



祝部による舞の奉納

東京講演会を開催

2018年10月13日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、第10回東京講演会を開催しました。この東京講演会は、日頃、関西を中心に活動している奈良文化財研究所の調査・研究活動の成果を、広く東日本の皆様にご紹介することを目的に2010年から始めた企画です。毎回、切り口を変えて文化財研究の魅力や面白さ、最新の話題をお伝えしており、今回は「藤原から平城へ—平城遷都の謎を解く—」と題して開催しました。

藤原京は694年に完成し、飛鳥から藤原へ遷都しました。条坊街区を備えた藤原京は、天武天皇と持統天皇が国家の威信をかけて造営した律令国家建設のまさにシンボルでした。ところが710年には平城京への遷都がおこなわれ、藤原京はわずか16年の短命に終わってしまいました。平城遷都、藤原廃都をめぐるのは、これまで様々な解釈がなされてきましたが、どれも定説にはいたっていません。

今回の講演会ではあえてこの平城遷都の謎に挑むことにしました。平城宮跡に関わる文献資料、建物の移築、儀式にともなう幢旗遺構、瓦からみた造営過程、藤原京の造営思想、奈文研本庁舎建設にともなう発掘調査であきらかになった平城京建設の大土木工事等、様々な観点から総合的にこの謎に迫り、日本古代国家の建設過程の実態解明に重要な成果をあげた最新の調査研究事例を6名の研究員から紹介しました。

当日の来場者は530名で、10時から16時にわたる長丁場の講演会でしたが、メモを取りながら熱心に聴き入る方も多く見受けられました。多数の方にご来場いただき、ありがとうございました。

(研究支援推進部 津田 保行)



講演会風景